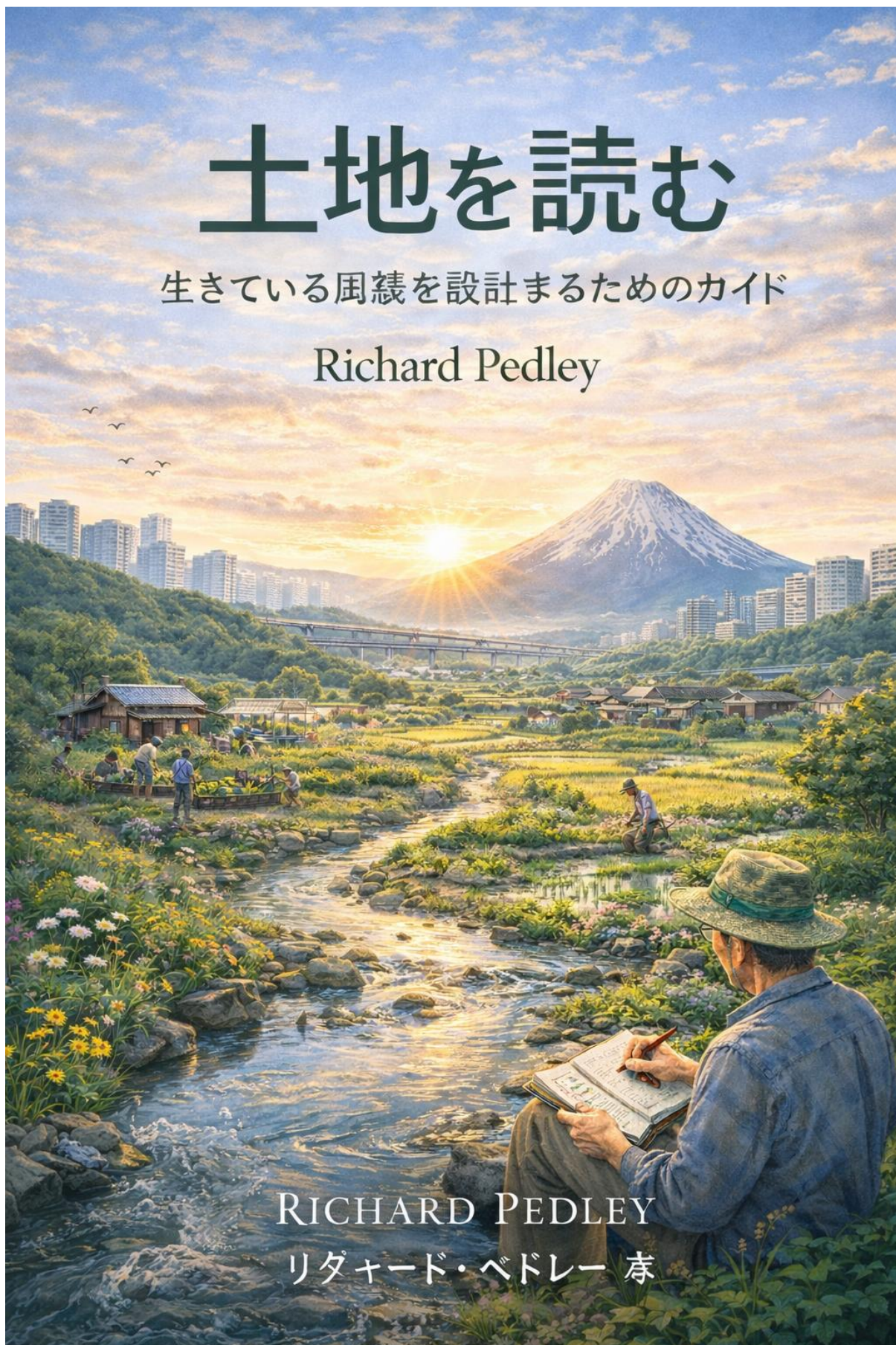


土地を読む

生きている周縁を設計するためのカイド

Richard Pedley



RICHARD PEDLEY

リチャード・ペドレー 著

土地を読む力を育てる

パーマカルチャー設計による再生型農業

日本の農村に向けて

リチャード・ペドリー 著

Richard Pedley

著作権について

Copyright © 2026 Richard Pedley. All rights reserved.

本書のいかなる部分も、著者の書面による事前の許可なく、いかなる形式または手段（電子的、機械的、複写、録音、その他を含む）によっても、複製、検索システムへの保存、または送信することはできません。ただし、書評または学術的著作物における短い引用を除きます。

2026年初版発行。

免責事項

本書は教育および情報提供を目的として作成されています。

著者は、本書に含まれる情報の正確性、完全性、または適用可能性について、いかなる表明または保証も行いません。土地管理、農業、生態学、および設計における結果は、立地条件、気候、法規制、および個人の状況によって大きく異なります。

読者は、本書に記載されているいかなる実践も実施する前に、自身の状況に適した専門家の助言を求める責任があります。著者は、提供された情報の使用または信頼から生じるいかなる損失、損害、または傷害についても責任を負いません。

図版クレジット

本書に掲載されているすべての図、ダイアグラム、およびイラストは、特に断りのない限り著者によるものです。

一部の図は、正確な縮尺や特定の立地条件を描写するためではなく、説明と学習を支援するために作成された概略図または概念図です。
。

著者について

リチャード・ペドリーは、生態学、農業、学習の交差点で活動する教育者、研究者、実践者です。農業、教育、環境研究にわたる三十年以上の経験を持ち、その仕事は土地システムが圧力、回復、および長期的な管理にどう応答するかを理解することに焦点を当てています。

十一年以上にわたり、リジェンプレナー・パーマカルチャー設計コースを設計・提供し、農家、土地管理者、農業者が生態学的原則と実践的応用に基づいた強靱で再生的なシステムを構築できるよう支援してきました。このコースはオンラインおよびパートタイムで提供され、ニュージーランド・アオテアロアおよび海外の参加者が実際の農村景観や農業環境に合わせた完全な設計ポートフォリオを修了できるようになっています。

Contents

| | |
|-------------------------------------|-------------------------------------|
| 序章：土地と語り始める前に | 6 |
| 第1章：なぜ設計は行動の前に来るのか | 9 |
| 第2章：この本との歩き方 | 16 |
| 第3章：原則はナビゲーションであり、ルールではない | Error! Bookmark not defined. |
| 第4章：パターンを読む | Error! Bookmark not defined. |
| 第5章：場所をあるがままに読む | Error! Bookmark not defined. |
| 第6章：気候の中に住む | Error! Bookmark not defined. |
| 第7章：地形が語る物語 | Error! Bookmark not defined. |
| 第8章：水を読む——流れが語る景観の言葉.... | Error! Bookmark not defined. |
| 第9章：土を読む——記憶と関係のかたち | Error! Bookmark not defined. |
| 第10章：生き物たちの静かな仕事——関係が景観を安定させる | Error! Bookmark not defined. |
| 第11章：創造的な主体性 | Error! Bookmark not defined. |
| 第12章：共同体というインフラ | Error! Bookmark not defined. |
| 第13章：市場という水路 | Error! Bookmark not defined. |
| 第14章：暮らしの場所から始める | Error! Bookmark not defined. |
| 第15章：循環を閉じる——アクアポニックスという学びの装置 | Error! Bookmark not defined. |
| 第16章：土と暮らす場所 | Error! Bookmark not defined. |
| 第17章：果樹との長い対話 | Error! Bookmark not defined. |
| 第18章：草地と家畜との対話 | Error! Bookmark not defined. |
| 第19章：境界を守る、境界に守られる | Error! Bookmark not defined. |

第20章：土地全体で考える **Error! Bookmark not defined.**

第21章：仕事を運びつづける **Error! Bookmark not defined.**

参考文献 **Error! Bookmark not defined.**

序章：土地と語り始める前に

夜明け前の静けさの中で、どこかの田んぼに水が張られている。

まだ暗い空の下、水面はかすかに光を集めている。畦道では名も知らぬ草が露を宿し、用水路の水音が絶え間なく続いている。土の下では、何十億もの微生物たちがすでに働き始めている。菌糸が根と絡み合い、養分を交換し、目に見えない経済が静かに回っている。人間が目を覚ます前から、土地は目を覚ましていた。

私がこの風景に初めて立ったのは、日本の農村を歩き始めた夏でした。義父に連れられて、棚田の畦道を歩いていた。七月の朝、空気はまだ湿りを含み、水面が光を映していた。隣り合った田んぼがそれぞれ違う色をしていた。なぜ色が違うのか、私には分からなかった。

義父は畦道で足を止め、一枚の田を指しました。「この田は水が冷たい」。それだけ言って、また歩き出した。彼にとっては当たり前のことだった。私には、ただの田んぼに見えていた。

その距離が、この本の出発点です。

土地には、それを歩き続けた人にしか見えないものがあります。水がどこに集まるか。霜がどこに降りるか。草の色が何を意味するか。これらは教科書に書いていない。同じ場所を、同じ季節を、何度も歩くうちに身体に染み込んでいくものです。

日本の里山は、その種の知識が何世代にもわたって積み重なってきた場所です。棚田の段の刻み方、水路の曲がり具合、畦の高さの微妙な差——それらは一度で設計されたのではなく、長い時間をかけて土地との対話の中で調整されてきた形です。

しかし今、その対話が途切れかけています。耕作放棄地の草むらが、かつて丁寧に管理されていた棚田を覆っています。土地の言葉を読める人は、年々少なくなっています。

この本は、その途切れかけている対話を、もう一度始めるための本です。

私はニュージーランド出身で、日本の土を何十年も耕してきた人間ではありません。日本語も流暢とは言えない。しかし、日本人の妻を持ち、義父から土地の読み方を少しずつ学び、日本の農村を何度も訪れて、農家と話し、田んぼを歩いてきました。

その経験が、私自身の見方を根本から変えました。ニュージーランドで当たり前だと思っていたことが、日本では通じないことを知りました。同時に、日本の農業が持っている深さ——小さな土地への親密な注意、季節への鋭敏な感覚——は、ニュージーランドでは稀なものだということも知りました。

この本は、その二つの視点を行き来しながら書かれています。日本の知恵を中心に置きながら、ニュージーランドと世界各地の経験を補完的に参照する。日本の読者が、日本の土地を新しい目で見るときの、一つの鏡として。

この本は、確実な答えを差し出しません。すべての土地は違い、すべての年は違い、誰かにうまくいった方法が、あなたの土地でうまくいく保証はありません。

この本が渡そうとするのは、見方です。土地を読むための視点、読んだことをもとに考えるための枠組み、考えたことを小さく試す勇氣。それを持って、あなた自身の土地を歩くための道具。

この本を読み終えたとき、同じ風景が少し違って見えていることを願っています。見えなかったものが見え始め、土地との対話が、少しずつ、始まっていることを。

夜明けの田んぼに戻ります。

水面に最初の光が差し、稲の葉先が金色に輝き始める。用水路の水音は変わらず続いている。土の下で、菌糸は静かに伸び続けている。

義父は畦道をゆっくり歩きながら、水面を見て、畦を見て、遠くの山を見ていました。何かを調べている様子ではなかった。毎朝の散歩のように自然な足取りでした。しかし今になって思えば、あの歩みの一つ一つが、土地への問いかけだったのです。

この本も、そのような歩き方で読んでもらえたらと思います。

第1章: なぜ設計は行動の前に来るのか

梅雨明けの棚田で

梅雨明けの朝だった。

義父に連れられて、棚田を歩いていた。日本の農村を初めて歩く朝だった。ニュージーランドから来たばかりの私には、すべてが新しく、すべてが美しく、そしてすべてが読めなかった。空気がまだ湿りを含んでいて、足元の草についての露が靴を濡らしていた。七月の光が水面に落ち、一枚一枚の田んぼがそれぞれ違う色を映していた。深い緑の田。黄みがかかった緑の田。わずかに青みを帯びた区画。隣り合っているのに、色が違う。私は足を止めて見ていたが、その違いの意味がわからなかった。ただ、きれいな風景だと思った。朝の湿った空気の中に、土と稲の匂いが混じっていた。

義父は畦道の途中で静かに立ち止まり、一枚の田を指した。「この田は水が冷たい」。

山からの湧き水が直に入る田だという。だから稲の成長が周りより遅い。しかし、冷たい水で育つ稲は病気に強い。彼はそのことを、天気の話でもするように淡々と語った。私が驚いているのに気づいた様子もなかった。彼にとっては、見れば当たり前のことだった。

それから隣の区画との境目に目を移した。「あそこに水が溜まるだろう。夜になると、冷たい空気がそこに落ちてくる」。霜の降りやすい場所だと言った。声を低めるわけでもなく、何か特別なことを教えているという素振りもなかった。水路に沿って少し歩きながら、彼はさらに続けた。あの畦が少し高いのは、隣の田に水が流れすぎないようにするためだということ。あの角に石が置いてあるのは、水の勢いを弱めるためだということ。一つ一つは小さなことだった。しかし、その小さなことの一つ一つに、理由があった。

私は同じ方向を見た。水が溜まる場所。冷気が落ちてくる場所。何も見えなかった。田んぼがあり、畦があり、水路がある。それだけ

だった。水の温度も、空気の流れも、何十年もかけて整えられてきた配置に込められた判断も、私の目には届かなかった。

義父はこの土地と会話をしていた。私はその言葉を一つも知らなかった。

答えを持って動いていたころ

あの朝の感覚を、何年経っても忘れられません。美しい場所に立っていたのに、その場所が示していることにまったく気づけなかった。義父の目に映っているものと、私の目に映っているものとの間にある距離。それは思っていたよりもずっと大きかった。

義父は農学の教科書を読んでいたわけではありません。大学で土壌学を学んだわけでもない。彼が持っていたのは、同じ土地を何十年も歩いてきたという事実でした。梅雨時にどこが溢れるか。夏の日照りにどこが最後まで湿りを保つか。台風の後、どの畦が崩れやすいか。秋の最初の霜がどこに降りるか。それらは誰かに教わったのではなく、同じ場所を、同じ季節を、何度も歩くうちに身体に染み込んでいったものでした。言葉にしにくく、マニュアルには書けない種類の理解です。

ニュージーランドで自分の土地を手に入れたとき、私は準備ができていると思っていました。パーマカルチャーの本を何冊も読み、ワークショップにも参加し、原則を理解しているつもりでした。土地を手に入れた最初の秋、すぐに動き始めました。果樹を植え、池を掘り、野菜畑を整備しました。半年で驚くほど多くのことを「達成」しました。自分は正しい方向に進んでいると信じていました。

冬が来て、問題が現れ始めました。

六月のある朝、まだ暗いうちに外に出ると、空気が刺すように冷たかった。果樹を植えた場所に近づくと、葉が白くなっていました。若い葉は縮れて、茶色く変色し始めていた。冷たい空気が夜のうちに斜面を流れ落ちて、あの窪地に溜まっていたのです。あの棚田で義父が静かに指さしたのと、まったく同じ現象でした。「夜になる

と冷たい空気がそこに落ちてくる」。義父にとっては見れば当然のことだった。私は自分の土地で、冬の朝に何が起きるかを一度も見せていませんでした。

池は乾季に干上がりました。雨の後に水がどこに集まり、どこへ流れるかを確かめていなかった。地形図は見ていた。しかし、実際の雨の後にこの土地の水がどう動くかは、地形図には書いていなかった。野菜畑は冬の風の通り道に位置しており、日照も十分ではありませんでした。

一つ一つの失敗を振り返ると、そこに共通するものが見えてきます。それは知識の不足ではありませんでした。霜の仕組みも、水の動きも、日照の重要性も、本で読んで知っていた。足りなかったのは、この土地で、この季節に、何が実際に起きているかを見るということでした。一般的な知識はあった。しかし、目の前のこの場所を見る目がなかった。

その後の何年もかけて、最初の判断の多くをやり直すことになりました。果樹を掘り上げて移植し、池を設計し直し、畑の配置を変えました。もし最初の一年を観察に使っていたら、その修正のほとんどは必要なかったはずです。急いだことの代償を、長い時間をかけて支払い続けました。



Figure 1: こちらは、第1章の導入イラストにふさわしい、簡潔で詩的、かつ概念を導くキャプション案です。

三年目の畑

日本でも、よく似た話を聞きました。

研修を終えた若い就農者が、山あいの耕作放棄地を借りて野菜づくりを始めました。意欲に満ちた最初の春、教科書通りに畝を立て、計画通りに植え付けました。梅雨に入ると、畑の三分の一が水に浸かりました。排水の悪い土地だったのです。冬と早春にしか見ていなかった。梅雨時にどこに水が溜まるか、知らなかった。一年目の収穫は、計画の半分にも届きませんでした。

二年目、彼は作付けを大きく減らしました。春から秋にかけて、雨の日に畑を歩き、水がどこに現れ、どこに流れ、どこに留まるかを地図に描きました。

しばらく迷った後で、近くに住む古老を訪ねました。「昔、この土地はどう使われていたんですか」。古老は少し驚いた顔をした後、

お茶を淹れてくれました。そしてゆっくりと話し始めました。排水の悪い区画はかつて田んぼだったこと。あの辺りは昔から水が集まる場所だったこと。水が集まるのは問題ではなく、その土地の性質だったのだということ。古老は特別なことを教えているつもりはなかったようでした。聞かれたから、知っていることを話したただけだった。しかし若い就農者にとって、それは土地の読み方が一変する会話でした。

三年目、彼はその区画を田に戻し、水はけの良い場所だけで野菜を育てました。同じ労力で、収量は二年目の倍になりました。

彼が手に入れたのは、新しい技術ではありません。その場所がすでに示していたことを受け取る姿勢でした。

棚田に刻まれた記録

あの棚田のことを、もう一度思い出します。

義父が指した冷たい水の入る田。霜の降りやすい窪地。水路の配置と畦の高さ。角に置かれた石。私にはただの風景にしか見えなかったあの場所に、何世代もの農家が観察し、試み、失敗し、やり直した記録が刻まれていました。どの田にどの水を引くか。どこの畦を高くし、どこを低く保つか。一度で完成した計画ではありません。長い時間をかけて、土地との対話の中で少しずつ調整されてきた設計でした。

手入れが活着している場所を歩くと、あることに気づきます。大きな変化の痕跡ではなく、小さな調整の痕跡が目に入ります。木の枝がある高さで整えられている。水路の泥が定期的にさらわれている。石垣の崩れかけた箇所が、大事になる前に直されている。目立つ工事ではなく、繰り返した小さな手の跡。あの棚田にも、それが至るところに刻まれていました。私はそれらを「きれいな風景」としか見ていなかった。風景の中に埋め込まれた何世代分もの判断に、気づいていなかったのです。

義父は農学の教科書が言わないことを、毎朝の歩きの中で読んでいました。問いを持って歩いていたのです。「今年の水はどうか」「この稲の色は何を意味しているか」「あの畦は持つか」。答えを持って歩いていたのではない。

急いでいた頃の私は、答えを持って歩いていました。本で学んだ知識、他人の土地で成功した事例。それらを自分の土地に当てはめようとしていた。土地が何を示しているかではなく、自分が何をしたいかが先に立っていた。それが、あの距離の正体だったのだと思います。義父と私の間にあった距離。あのとき言葉にできなかったもの。足りなかったのは、情報ではなく、姿勢だったのです。

この本が渡そうとするもの

もしあなたがこの本を手にとったなら、おそらく何かか噛み合っていないと感じているのではないのでしょうか。

作物が全く育たないわけではない。しかし、努力を重ねるほど、なぜか楽にならない。正しいとされる方法に従っているはずなのに、どこか安定しない。除草や獣害や連作障害。それぞれ別の問題に見えます。しかし、もしかすると、根のところで何か共通しているのかもしれない。技術が足りないのではなく、目の前にすでに現れているものを、まだ受け取れていないだけなのかもしれない。

この本は、確実な答えを差し出すものではありません。生きたシステムに確実な答えはないからです。すべての土地は違い、すべての季節は違い、ある場所でうまくいったことが、別の場所では思わぬ結果を招くことがある。今年の正解が、来年の間違いになることもあります。

この本が渡そうとするのは、見方です。土地を読むための視点と、読んだことをもとに考えるための構造と、考えたことを小さく試してみる勇気。あなたの土地で、あなた自身の目で、あなた自身の手で。

私はまだ学んでいる途中です。ニュージーランドの自分の土地でも、日本の風景からも、読めていないことのほうがはるかに多い。この本に書かれていることが日本のすべての文脈で通用するかどうか、正直に言えば、私にはわかりません。しかし、土地を見ようとする姿勢は、場所を超えて共有できるものだと思っています。

まず一週間、歩くだけ

この章を読み終えたら、一つだけ試してみてください。

明日から一週間、毎日同じ時間に、あなたの土地を歩いてください。畑でも庭でも、ベランダから見える景色でもかまいません。十分でも二十分でもいい。何も変えようとせず、ただ見る。

小さなノートを持って行ってください。書くのは三つだけです。今日の天気。気づいたこと一つ。浮かんだ問い一つ。

雨の後であれば、水がどこに現れるかを見てください。どこに溜まり、どこに流れ、どこで地面に吸い込まれていくか。晴れが続いた後であれば、どこが最初に乾き、どこが最後まで湿りを保っているかを見てください。早朝であれば、露がどこに残り、どこにないかを見てください。露のパターンは夜間の冷気の流れを映しています。義父があああの棚田で読んでいたものと、同じものかもしれません。

一週間後、ノートを見返してみてください。同じ場所の名前が繰り返し出てくるかもしれません。初日には何も感じなかったのに、四日目に何かに気づいているかもしれません。あるいは、まだ何も見えないかもしれません。それでもかまいません。観察は技術であり、繰り返しの中で静かに育ちます。

次に何かを始めようとする前に、三日だけ待ってみてください。

わからないということが、最初の一言です。

第2章: この本との歩き方

三世代の余白

ある農家の台所で、一冊の本を見せてもらったことがあります。

義父の知り合いの、八十を過ぎた農家でした。山あいの集落で、何十年も米と野菜を作っている人でした。薄暗い台所にお邪魔して、お茶をいただきながら話していたとき、彼が棚から古い本を取り出しました。農業の実用書でした。表紙は擦り切れて文字がほとんど読めず、ページの角は丸くなり、背は幾度も開かれてゆるんでいました。手に取ると、思ったより重かった。紙が湿気を吸って少し膨らんでいたのかもしれませんが。

しかし私が驚いたのは、余白でした。三色の筆跡が重なっていたのです。黒い万年筆の細い字。青いボールペンのやや大きな字。そして鉛筆の、まだ新しい書き込み。「祖父と、親父と、俺だ」と彼は言いました。

同じ本を、三世代が使っていた。

彼はページをめくりながら、祖父の書き込みを指で辿りました。「ここに『遅霜、四月十二日』とある。親父のは『この年は四月二十日まで降りた』。俺は去年、『三月末に降りた。早くなっている』と書いた」。同じ欄に、三つの時代の霜の記録が重なっていました。

さらにページをめくると、田植えの時期について書かれた段落がありました。その横に、祖父の字で「水温が低い年は五日遅らせる」。その下に父の字で「品種を変えてからは三日で足りる」。そして彼自身の鉛筆で「温暖化で早めても問題ないが、遅霜に注意」。三つの判断が、同じ余白の中で静かに会話していました。それぞれの一行の奥に、書かれていない何年分もの観察がある。うまくいった年も、いかなかった年も。印刷された文字は変わっていない。しかし本は、三度生まれ変わっていました。

「これは読み終わる本じゃない」と彼は言いました。湯呑みを置いて、少し間を取ってから続けました。「毎年、同じところを開く。でも、毎年違うことが見える」。

読む。出る。試す。戻る。

あのとき私は、自分がどのように本を読んできたかを振り返っていました。最初から最後まで通して読み、理解したつもりになり、棚に戻す。次の本を手にする。情報として受け取り、情報として保管する。しかし彼の本は、情報の容れ物ではなかった。土地との会話の記録であり、その会話はまだ続いていました。三世代目の書き込みが鉛筆だったのは、まだ書き足す余地を残しているからかもしれません。その未完成さが、本の生命力に見えました。

この本も、そのように使われる本でありたい。

一度読んで理解する本ではなく、季節ごとに戻ってくる本として。最初から最後まで順番に読む必要はありません。すべてを理解してから土地に出る必要もありません。むしろ、理解しないまま土地に出てほしいのです。わからないことを持ったまま外に出ると、土地が何かを見せてくれることがあります。そして土地で見たものを持って本に戻ると、前に読んだはずの言葉が、違って響くことがあります。

読む。出る。試す。戻る。

この四つの動きが、この本の使い方です。順番ではなく、循環です。水のことを気になるなら、水の章から開いてください。土のことで困っているなら、土の章へ。何が気になっているかわからないなら、目次を眺めて、目が止まった章を開いてください。そこがあなたの始まりです。

私自身、パーマカルチャーについて最初に手にした本を通して読んだわけではありませんでした。水の章を本当に読んだのは、大雨の後に自分の土地で水が予想外の場所に現れたときでした。長い雨が止んだ翌朝、庭の一角に水が光っていた。そこに水が集まるとは思っていなかった。なぜだろうと考えながら本を開くと、水の動きに

ついて書かれた文章が、昨日までとはまるで違うものに見えました。文字が同じでも、読んでいる私の目が変わっていたのです。

土壌の章が腑に落ちたのは、もっと後のことでした。何を植えてもうまくいかない場所があり、ある日そこを掘り返しました。スコップが思うように入らない。掘り出した土は灰色がかっていて、握ると塊になったまま崩れなかった。あの手の感触を持って土壌の章に戻ったとき、「排水不良」という言葉が、教科書の用語ではなく自分の経験になりました。

経験が言葉に肉をつける。失敗が言葉に重みを加える。あの三世代の本と同じことが、起きていたのです。

間があるところに、次の観察が育つ

日本語に「間」という言葉があります。何もない空間、何もしない時間。しかし、何もないわけではない。

同じ所作を何年も繰り返すうちに、ある日、以前は見えなかったものが見える。技術が変わったのではなく、目が変わっている。その変化は、繰り返しの「間」の中で、静かに育っていたものです。

読んだけれどまだ動かない。理解したつもりだけれど、まだ試さない。その「間」を恐れないでください。急いで全部を実行しようとすると、土地が見せてくれるはずのものを見逃してしまいます。

この本のすべての章が、すぐに行動を求めているわけではありません。ある章は今のあなたに必要なかもしれない。ある章は三年後に初めて意味を持つかもしれない。ある章は、何も響かないまま閉じることになるかもしれない。その章の出番が、まだ来ていないだけです。

義父の家に、古い農業暦がありました。二十四節気と七十二候が記されたものです。一度読んで理解するものではなく、季節が来るたびに開くものでした。「啓蟄」と書いてあるページを、三月になると開く。虫が動き出す頃だと書いてある。しかし今年の三月は、朝

の土がまだ冷たい。虫は出ていない。暦と現実のずれに気づく。そのずれ自体が、今年の子節の性格を教えてください。

来年の三月にまた開く。今度は暖かい春で、暦より早く虫が動いている。再来年は桜が遅く、啓蟄の頃にまだ雪が残っている。同じ文字を読みながら、見えているものが毎年違う。暦の言葉は変わらない。しかし、暦と現実の間に生まれるずれの質が、毎年の子地の声になっている。

春に読む水の章と、梅雨に読む水の章と、台風の後子読む水の章では、同じ文字でありながら違うものが見えるはずで子。一度で理解しようとしな子でください。子節が、あなたの子理解を育ててくれます。

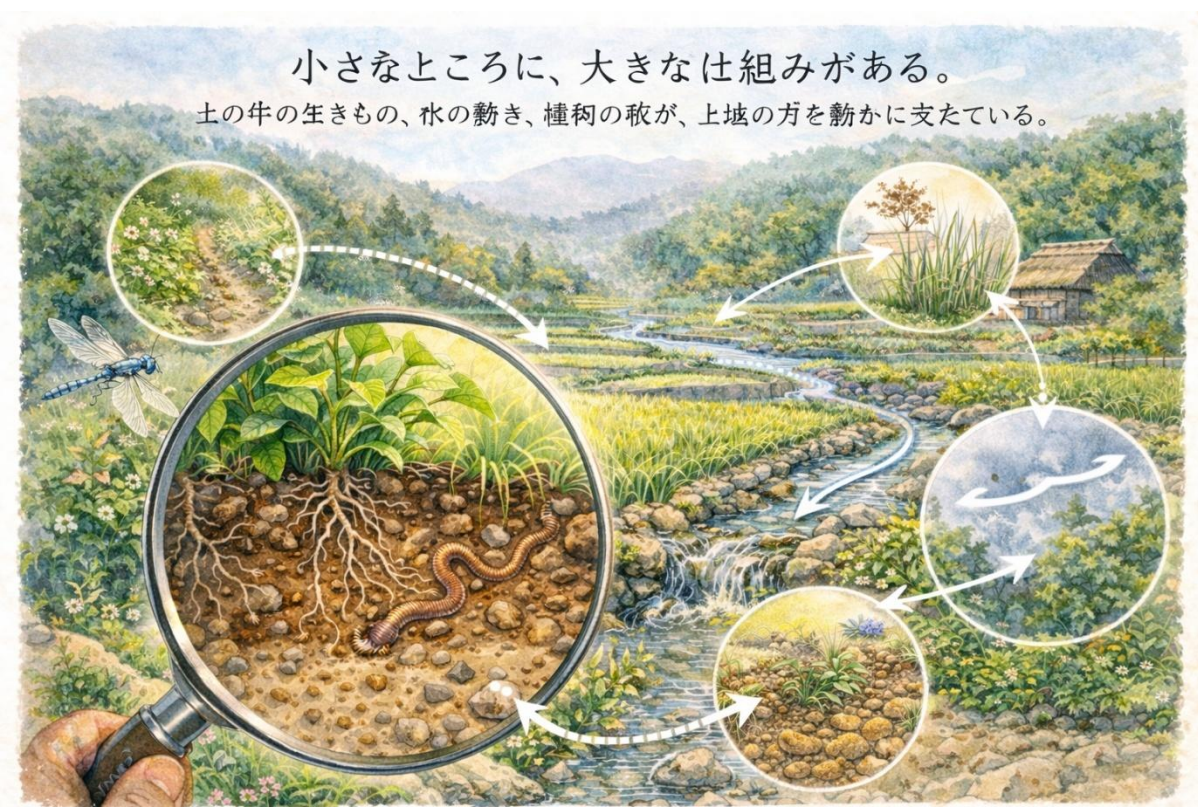


Figure 2: 小さなところに、大きな仕組みがある。土の子中の生きもの、植物の子根、水の子動きが、土地の子力を静かに支たている。

土地は声を持ち、人もまた土地の一部

どの章を読んでいるときも、できればあなたの土地を心のどこかに置いておいてください。持っている土地でも、借りている畑でも、ベランダから見える風景でもかまいません。

水の動きについて読んでいるとき、あなたの土地に心移してみてください。雨の後、水はどこに現れますか。どこに集まり、どこに流れ、どこで消えますか。土のことを読んでいるとき、先週掘った土を思い出してください。その色、匂い、手の中でどう崩れたか。

こうして読むと、文字が情報ではなく問いになります。本に書いてあることと、自分の土地で見ていることとの間にずれが生まれる。そのずれが、次の観察を方向づけてくれます。本と現実がぴったり合うことよりも、ずれに気づけることのほうが大切なのです。

この本を日本で使うとき、一つのことが繰り返し現れます。土地は一人のものではない、ということです。

用水路の水は上流から下流へと流れます。一人の判断が、隣の家の田に届く。水を入れる時期、水を落とす時期、田植えの順番。水利組合の取り決めがあり、長年の慣行があり、言葉にされないまま守られている了解がある。「うちの集落では、こうやってきた」。その一言の中に、何世代もの調整と折り合いが詰まっています。

観察だけでは見えないものが、地域の人々との会話の中に眠っています。なぜこの区画だけ形が違うのか。なぜあの木が一本だけ残されているのか。答えは本には書いてありません。しかし、長くその土地を見てきた人が覚えていることがあります。何かを始める前に、まず近くの人と話すこと、聞くこと。それ自体が、この本の使い方の一部です。土地は声を持っていますが、その声を聞いてきた人たちもまた、土地の一部です。

あなたが書き込む余白

あの三世代の本のことを、もう一度思い出します。

あの本がただの実用書と違っていたのは、余白があったからです。印刷された文字の周りに、書き込むための空間があった。そしてその空間を、三人の農家が何十年もかけて埋めていった。祖父の霜の記録の隣に、父の判断が書かれ、その隣に孫の観察が加わった。本は骨格を提供し、余白が血肉になった。

この本にも、余白があります。あなたの土地の土の色は書いてありません。裏山を吹き降ろす風の癖も書いてありません。梅雨時にあなたの畑のどこに水が溜まるかも書いてありません。それらはすべて、あなたが書き込むべき余白です。ノートに。記憶に。身体感覚に。

読みながら、小さなノートを手元に置いてください。書くのは三つだけで十分です。

今日、目に留まったこと。雨の後に光っていた水溜まり。いつもより早く咲いた花。小さなことで十分です。

それについて浮かんだ問い。なぜあそこに水が集まるのか。なぜあの木だけ葉の色が違うのか。答えを知らなくてもかまいません。問いがあれば、次に土地を歩くときの目が変わります。

来週、小さく試せそうなこと。雨の後にもう一度あの場所を見に行く。一握りの土を掘って触ってみる。地元の人に、昔のことを聞いてみる。戻せる規模の小さな実験で十分です。

そして季節ごとに、ノートを読み返してみてください。三か月前の自分が何を見ていたか。どんな問いを持っていたか。何に気づけていなかったか。その変化自体が、あなたの目が育っている証拠です。あの三世代の余白のように、あなた自身の記録も、少しずつ重なっていきます。



三村佳の余語。

両しホを聞かををがるに、人は三村の岸邊を築きましていく。

Figure 3: 土地を読むことは、まず注意深い観察から始まる。水の流れ、土の状態、植物の生育、小さな生き物たちが、風景を形づくる見えない仕組みを教えてくれる。

。

本と土地が食い違ったとき

この本は、あなたの土地を私より深く知ることはできません。どれだけ丁寧に書いても、あなたの小屋の裏の霜溜まりのことは書けません。丘の隙間から吹き込む風の向きも、一枚の畑の中の土の変わり目も、それらは土地だけがあなたに教えてくれるものです。

本に書いてあることと目の前で起きていることが合わないなら、目の前のことのほうが正しい。そのずれに気づけたこと自体が、あなたが注意を払っている証拠です。

あの農家の台所で、彼が本を棚に戻すとき、少し迷ってからまた開いたのを覚えています。何か確認したいことがあったわけではないようでした。ただ、手が自然にそのページへ向かった。長い付き合いの中で身についた、静かな習慣のように見えました。

読み終えなくても、かまいません。

目が止まった場所から、始めてください。